

第5章

20周年記念寄稿



「創立二十周年おめでとうございます。」

初代岩手県環境保健研究センター所長
鳥羽 良明

思い起こせば 20 年前、岩手県は既存の衛生研究所と公害センターを統合した新しい組織を創るため、その計画を具体化する委員会を設置しました。私は東北大学から推薦されその委員会のメンバーの一員として設置計画に関わることになり、何回かの委員会の議論の中で私が提案した名称「環境保健研究センター」が採択され、70 歳になる私が初代所長に任ぜられました。

私は東北大学教授を 23 年間勤め、主に大気・海洋の相互作用に関する研究・教育の専門職でしたので、県の仕事ましてや関係機関の長となると、これまでとは全く違う職種となります。センター立上げに伴う連絡調整など、これまで経験したことがない案件や戸惑うことも多く、関係者の方々にはご迷惑をお掛けしましたが、曲がりなりにも所長の職を全う出来たのは、当時のスタッフのご助力の賜物と心から感謝しております。

一方、仕事とは直接関係していませんが、岩手日報とのことも紹介させていただきます。当時、センター開設が間近なこともあり、同紙の 2001 年 6 月 26 日「人」欄に私のことが掲載されました。このことをきっかけとして、同年 8 月から翌年 7 月までの 1 年間、月 1 回「心の原風景」と題する私のエッセイを、同紙の教育コラムに 12 回にわたり連載され、多くの方々に読んでいただいたことが心に残る大きな体験でした。また、釜石の陸中海岸から遠野、花巻を通って盛岡まで何度か車で走った風景なども思い出されますが、在任中の様々な出来事は、私の人生にとって貴重な得難いことでした。

昨今、異常気象、新型ウイルスなど地球環境問題への対応が求められていますが、20 周年を迎え、センターの特徴でもあるグローバルとローカル双方の視点からこれらの問題に取り組んでいただき、さらに発展されますことをご期待申し上げます。

「創立 20 周年記念誌に寄せて」

～感染症と私～

太田 美香子

岩手県環境保健研究センター創立 20 周年を迎えるにあたり、これまでを振り返ってみたいと思います。

私が所属する検査部は、行財政構造改革プログラムに係る平成 16 年から 19 年までの定数縮減計画（12%減）により、平成 17 年 4 月に地方振興局保健福祉環境部（保健所）の試験検査部門（盛岡、一関、宮古、二戸の 4 保健所）が検査部として環境保健研究センターに統合されてきた部です。

平成 16 年 7 月から統合に向けた検討が行われ、数か月後には引越しというとても忙しいスケジュールでした。当初、検査部員は、10 名でしたが、平成 20 年の盛岡市保健所設立により業務減少が見込まれることから 1 名減になり、その後さらに 1 名減となり現在は、部長を含む 8 名で業務にあたっています。

検査部の業務内容は、飲用水、公共用水、事業場排水、食品、感染症、食中毒等の保健所で実施していた試験検査項目で、私は細菌検査を担当しています。保健所の中で仕事をしていた時と違い、食中毒や感染症などの緊急検査対応時には、現場とのやり取りが難しいと感じることもありますが、以前保健所で経験した赤痢の集団感染や腸管出血性大腸菌 O157 食中毒事件など大変な時に一緒に働いた保健所の職員の方々とは、顔が見えない中でも仕事がスムーズに運ぶように思います。人とのつながりの大切さを感じるこの頃です。

現在、新型コロナウイルス感染症の世界的な大流行により百年に一度の公衆衛生危機と言われています。保健所の統廃合により私が保健所に入った昭和 50 年代には 15 あった保健所も今は 9 保健所になり、試験検査業務は環境保健研究センター 1 か所に統合された中で先の見えない新型コロナウイルス感染症対応に多くの職員が日々業務に追われています。

これまでも百年前、世界的に流行したスペイン風邪や昭和 30 年代に北海道を中心に大流行したポリオなど多くの感染症に見舞われてきました。これからも保健所など公衆衛生の仕事は重要になっていきます。今後も新たな感染症に対応し、一早く感染拡大を防止するために環境保健研究センターが活躍できるよう技術や知識を深め経験を積んでいかなければならないと思います。これからの若い人達に期待しています。

私自身 1 歳の時にポリオに罹患して麻痺が残り、障害があります。多くの人に支えていただき無事に定年退職を迎え、周りの皆さまに背中を押して頂いて再任用職員として仕事をさせて頂き 3 年目を迎えました。感染症で苦しむ人が一人でも減るために少しでも役立つことが出来ていたら嬉しく思います。お世話になったたくさんの人にこの場をお借りして感謝いたします。

岩手県環境保健研究センターの一層のご発展と皆様のご活躍を祈念いたします。

（元検査部 上席専門研究員）

「SWEET MEMORIES」

佐藤 卓

私は平成9年に衛生研究所微生物部（当時、化学職で微生物担当はイレギュラーだったと思います。）に配属され、環境保健研究センター発足にあたり、そのまま保健科学部（またまた微生物担当）所属となり5年間在籍しました。（その後出たり入ったりを繰り返し、合計15年間お世話になっています。）センター初期のエピソードをいくつかご紹介します。

☆SWEET MEMORIES

平成13年4月、組織としての環境保健研究センターはスタートしましたが、職員とお仕事は、まだ旧衛生研究所庁舎で行っておりました。秋には、研究所の引っ越しという大事業が控えています。引っ越しの準備のため、職員が手分けして新旧の庁舎を行き来していました。ある日、新しい庁舎で実験室に置く機器のレイアウトを考えていたところ、突然管内放送から、あのペンギンのコマーシャルで聞きなれた曲が流れてきました。一瞬、なんで？と思い時計を見るとジャスト12時、お昼の休憩時間スタートのチャイムだったのです。なぜに聖子ちゃん！令和の今でも、毎日12時には館内に流れる「SWEET MEMORIES」、当時としてはとても新鮮な気持ちで聞き、あらためて新しい仕事が始まるのだなと感じました。

☆雉

今では、盛南開発地域のど真ん中で大都会となった飯岡地区ですが、当時は見渡すかぎり田んぼと畑が広がり、梅雨にはカエルの大合唱がなり響く自然豊かな環境でした。そして、仕事中でも雉のケーンケーンの鳴き声が聞こえ、時々つがい

中庭にも訪れていました。ある日、地球科学部のM氏から「雉が窓に衝突した！」との連絡があり、確認したところ、すでに雉は死亡しておりました。M氏はなぜかニヤニヤして私を見、雉はよく出汁がでるとかなんとか。さばき方がどうか。はい、手順は省きますが（羽むしりが一番たいへん！）、スタッフでおいしくいただきました。

☆猫

保健科学部では、現在新型コロナウイルス感染症対応で休日出勤が日常となっていますが、センター発足当時もやれレジオネラだ EHEC だなど様々な感染症対応で休日出勤は結構ありました。ある土曜日、出勤は私一人だったのですが、2階試薬調製室で作業をしていたところ、なぜか「ごそごそ」という音が聞こえてきました。「誰もいないはず・・・」背筋がゾクツとしてきます。「ごそごそ」はごみ箱にしていた段ボール箱の中から聞こえてきます。ドキドキしながら段ボール箱を足先でつつんしたとたん、子猫が紙屑をまわって飛び出してき、そして2階の廊下をものすごいスピードで走って行きました。あわてて廊下に出てみるともう子猫はいません。その後、館内をあちこち探してみましたがまったく見つかりませんでした。どこから入り、どこに行ったのでしょうか、未だに謎です。

そのほか、1階廊下水浸し事件とか、白い粉事件とかいろいろありましたがこのへんで、どんどはれ。

（元保健科学部 上席専門研究員）

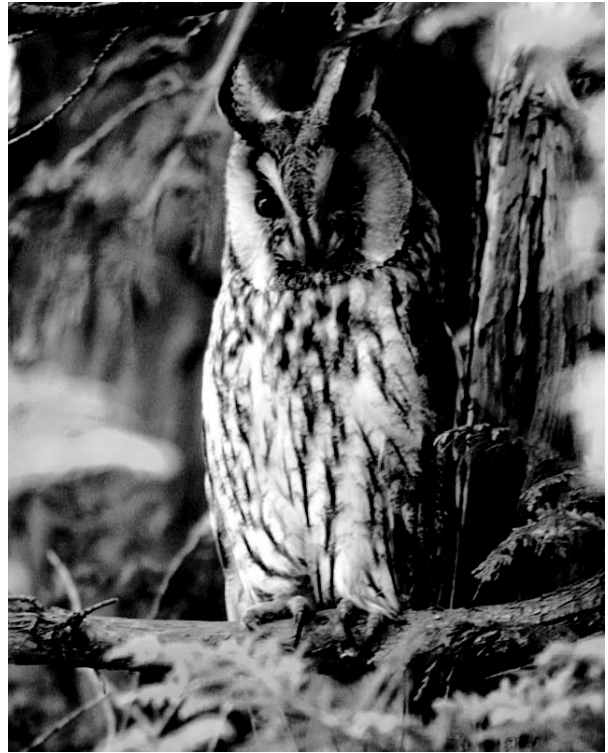
「田園から都市への 20 年」

前田 琢

環境保健研究センターが開所して初めての冬を迎えた頃、関東地方からこの地に赴任した。当時、庁舎周辺では市街化に向けた開発工事が少しずつ始まっていたが、まだ田畑や屋敷林、りんご園などが広がるのどかな環境に囲まれていた。それは少し郊外へ行けばどこにでも見られるようなありふれた農村景観であったが、自然環境研究室という真新しい所属で働くために北国・岩手県に来たばかりだったので、まわりにどんな生き物がいるのか興味津々であった。しばしば見かけたのはキジで、藪の中を雛連れて歩いていたり、庁舎のガラス窓に映る自分の姿に威嚇したりして所内の話題を作った。構内でカルガモが卵を産んだり、正面玄関からシマヘビやササゴイの幼鳥が入って来たりする騒動もあった。

ある時、近隣でフクロウ類のトラフズクが越冬していることがわかった。岩手県内では生息記録がとても少なく、希少な絶滅危惧種だった。同じような環境は他にいくらでもあるのに、よりによってこんなにも身近に棲みついてくれたとなれば、この鳥を研究対象にしないわけにはいかないと、しばしば自転車に乗って観察に出向いた。やがて屋敷林で繁殖も確認されるようになり、愛らしい雛の姿は地域住民のあいだでも大人気となって、テレビ局も取材に来た。衰弱した幼鳥が保護されたこともあり、リハビリ後に発信器を着けて放し、夜を徹して追跡したことも思い出される（この時の顛末は、年報第 6 巻収録の報文に詳しい）。

ある夜、残業して遅い時刻に職員玄関を出ると、目の前の木からトラフズクの親鳥の低く重厚な鳴き声が聞こえてきた。職場のすぐ隣に野生動物が息づいていて、何気ない瞬間にふれあえる、何ともすばらしい所で働いているものだと誇らし



く思ったものである。それから数年にわたって繁殖を繰り返し、個体数も徐々に増えてきた。将来、この地域がトラフズクと住民が共存する都市のモデルになればと思い描いてみたりもした。しかし、行き着いた先は、現在の周辺環境を見渡せばわかるとおり、緑の乏しい市街に大型店のネオンが瞬く街になった。せめて営巣している樹木だけは残したいとの住民の意向も叶えられず、工業技術センター内の木に人工巣を造って引越しを促したものの成功せず、市街地開発の進捗とともにトラフズクの生息場所は 1 つまた 1 つと失われていった。1 羽だけになって淋しく越冬していた 2013 年を最後に、姿はついに見られなくなった。

のどかな田園から賑やかな都市へ、劇的な変化を通り抜けて環境保健研究センターは 20 周年を迎えた。いま職員玄関を出ると、目の前にあるのはパチンコ屋である。そのライトが射し込む薬品貯蔵庫の奥で、今年ハクセキレイが子育てをした。こうした逞しくしたたかな都市の生き物が、いまの日常のささやかな野生とのふれあいである。

(現地球科学部 上席専門研究員)

「祝 20 周年ああ没 20 周年」

白藤 周司

環境保健研究センター設立 20 周年。公害センターが無くなってもう 20 年も過ぎたのかと…。

環境保健研究センターが飯岡新田に建った頃は、空中廊下に吹き抜けのある広くて開放的な作りの瀟洒な庁舎が、農業用水組合が管理する水路が作り出す田園風景から浮き出ているように見え、夜ともなれシーンと静まり返り、聞こえるのは環境研センターの排気音（ドラフト）と野生生物の鳴き声だけでした。ただ、微量分析ヘトレンドが向かっていることから、盛岡の中心地に比べて空気が清浄であることは適地を選んだと思いましたが、時間が経つとともに、ショッピングモールが建ち道路が整備されると、あっという間に商業住宅地になってしまいました。幸いなことに、環境研センターの建物は周りの風景とマッチしてきたなど、思いました。

20 年も経つと、おそらく公害センターを知らない、存在したことすら知らないのではないかと思いますので、（知らなくてもいい、興味ないという人にも）少し御紹介したいということで。前身の公害センターは盛岡の街中のど真ん中にあり、県庁・市役所から徒歩 7~8 分、コンサートや絵画展が催される県民会館の北側に、今も 4 階建ての地味なビルが残っています(心霊スポットではありません)。

測定や試料採取などの現場作業が多く、先輩の指導の下に作業が進められることから、親分子分的雰囲気の所謂おやじ職場でした。周辺はお店の賑わいがあり、書店や古書店、酒販店に酒造会社、蕎麦屋に定食屋などサラリーマンおやじにとっては、今でも都合の良い処です。

看板に「研究」の 2 文字が付くことで、職員も親父タイプから研究者タイプやインテリに移ってきており、リケジョ(理系女子)の進出が目覚ましいやら、勇ましいやら。

本来、環境問題への関心は女性の方が高く、その中でも、特に小さな子供を持つ母親が人一倍高いとか。何を食べても飲んでも、美味しく食べて

酔っぱらえば良いという「親父連中」が廃れ、子供の健康と安全をいつも考えている「母ちゃん集団」にシフトして来ているなど実感しています。

20 年経って思うには、環境研センターは庁舎建物、装備ともに充実しており、就業環境は公害センターの比ではないのですが、公害センターには、盛岡市民が連綿と作り上げてきた見栄え良く居心地満点の中津川があったことがラッキーだったと言えます。空間、富士見橋、上の橋、与の字橋…中津川を基準としたり、目標としたり、まさに都市河川の理想形といえる中津川をフィールドとして使えたことは本当にラッキーだったと言えます。

学ぶことも多かったです。例えば、中の橋から毘沙門橋までの間を会場として水防訓練が行われた時、杜陵小学校の子供たちによる「川に親しむ」エキジビション(ただの水かまし)を見ていたら、こどもたちがなんの抵抗もなく川に入り込み、漕いで歩いて、川に手を突っ込み、カジカを捕まえ始めたのです。これを見て、カジカが生息するという水質良好という条件に、子供たちが安全に川で遊べるという条件も加えた、よりハードルの高い条件を市民は受け入れてきたことに気づきました。他にも中津川から色々とサジェスチョンをいただきました。“瀬・早瀬と澗みによる自然浄化と高度処理”、“川底と泉に湧水”、“居住(生活)空間と川浴いのカフェテリア”、“遊びと子供の発達(体験と心理)、景観・風景・風土と絵心詩心…等々。ラボにフィールドやプラントがあることは良いことです。

ど~もやっぱり環境研センター 20 周年記念から、かなりピントのずれた内容です。すみません。

“ステキなバスに乗り、年次をとって川で水かまし~♪

センターはリバーサイド、川浴いリバーサイド、フウウ~ウ~リバーサイド♪”

(井上陽水 リバーサイドホテルにオマージュを捧げて)

(元環境科学部 上席専門研究員)

「私の環境研での思い出」

佐々木 和明

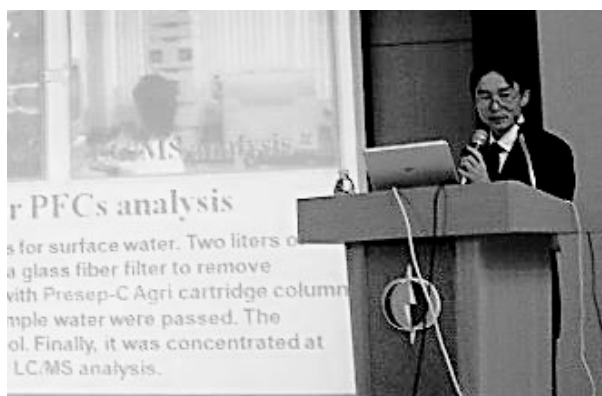
私は、岩手県環境保健研究センター(以下環境研)が開所する前年の平成12年4月に、環境研環境部門前身の岩手県公害センターに、上席専門研究員として配属になりました。入庁以来行政職で40歳代半ばを過ぎて初めて念願の研究員生活をスタートさせました。

環境研開所時、通常の監視業務の他に研究員は一人一研究テーマを持つこととされていました。私の研究テーマは、『未規制物質のLC/MSによる分析法開発』でした。環境研に環境分析の最先端技術を搭載したLC/MSが導入されたことにより可能となった研究テーマです。この研究テーマは、環境省委託業務『環境エコ調査分析法開発』を受託することで平成13年度からスタートしており、その後担当者は変わっていますが以来現在に至るまで20年間継続されています。開発が成功し続けているのは、研究を継続していただいた担当者方々の、たゆまないご努力と環境省分析法開発検討委員の皆様のご指導の賜物と大変感謝しております。

この研究テーマでは、岩手県として世界に先駆けて環境水中の有機フッ素化合物分析法を開発するなど多くの成果を上げています。その成果は、毎年国内の学会等で発表するとともに、日中合同環境化学会(2004 北京)、日韓合同環境化学会(2010 ソウル)、国際ダイオキシン学会

(2007 東京)等でも発表することが出来ました。環境省や国内外の共同研究者からの分析依頼も多く大変忙しい毎日でしたが、国内外で研究成果を毎年発表出来たことは、今は楽しい思い出の一つとなっています。

また、研究員生活20年余りの間には、東日本大震災や有害化学物質の流出事故対応に追われる日々もありました。その中で、知事表彰や全国環境研協議会長賞を頂いたことは大変励みになりました。これまで大過なく研究員生活を継続出来ましたこと、ひとえに歴代の所長、諸先輩方、同僚の皆様のご指導ご助力によるものと大変感謝しております。



2008 Annual International Symposium of Dioxin Research Center, Pukyong National University, Busan Korea

最後に知事から職員表彰時頂いたメッセージ(H21.10.30)を残します。

“To Boldly Go Where

No One Has Gone Before”

“誰も行ったことのないところへ果敢に挑戦する”
(元環境科学部長)

「3階実験室からの夕日」

菅原 隆志

開設当初、衛生科学部の実験室から西の空を眺めると、夕日がとても綺麗だったのを覚えています。黄色く変わり始めた田んぼや畑の中に防風林を持った民家が点々と見える中、後ろの山々へ沈む夕日が、また格別に綺麗に見えたものでした。現在の環境保健研究センター3階から外を眺めると、道路も整備され、住宅が立ち並び、とても都会的な眺めになっています。目の前の交差点には車が次々と通り過ぎ、かつての面影などどこにもないようです。

開設当初は、春になると目の前の空き地で、キジがケーンケーンと鳴き、のどかな田園が広がっていました。その後、イオンなどもでき、都会化が進むと、周りも土地造成が始まりました。造成のために盛り上げられた土の上で、キジがケーンケーンと鳴いているのを見て、ある人が「キジが苦情を言っているなあ。」と言っていました。せつない気持ちを少々感じながら、笑ったのを覚えています。道路も曲がりくねった細い道路しかなく、通勤は大変でした。開設当初は水沢からの通勤で、仙北町駅から環境保健研究センターまで歩いて来ていました。道路は整備されていません。道路など関係なく直線的なルートを開拓し、畑や荒地の中を水路など飛び越えながら、環境保健研究センターを目指してひたすら歩いたのを覚えています。今ではとても考えられません。

実験室の中も測定機器は、GC、GC-MS、HPLC、LC-MS が主流で、まだシングルマスの時代でした。その後 GC-MS/MS、LC-MS/MS とトリプルマスの時代に突入し、分析方法も劇的に変化し、定量限界もどんどん下がってきました。多成分分析もせいぜい10数成分だったものが、100成分以上の同時分析が可能となってきました。定量限

界の低下、多成分分析の実施は、開設当初の法律改正で施行が始まった GLP による精度管理に大きな変化を与えました。日々精度管理との戦いだったように思います。また、測定機器の変化とともに、前処理方法も固相を中心としたスマートな方法に移っていきました。大きな分液ロートで有機溶媒ジャブジャブの時代からマイクロピペッター等を使い有機溶媒少量の時代に変化したことは本当に劇的でした。そのような変化の時代をまさにリアルタイムで体感させていただいたことは、本当に幸せなことだったと思っています。周りの風景も施設内の分析機器もすっかり変わってしまいましたが、3階から眺める山々は当時と変わりありません。そして、その山々に沈む夕日も当時と変わらず綺麗です。

(元衛生科学部長)

「思い出されることなど・・・」

中南 真理子

古い建物での勤務ばかりの私でしたが、やっと“新築”の環境保健研究センターで働かせていただけることになりました。

とはいえ、センター発足当初は、新築の建物特有の VOC 汚染のため、検液調製場所を求めて屋上に上がったり、屋上にいけば今度は造成中の周囲からの土埃に悩まされたり、周辺には飲食店や小売店なども極限られる状態で昼食等の調達に不自由したりと、右往左往の日々が思い出されず。

また、ここ飯岡新田にて永く暮らしているキジが、センターが建ってからもこの周辺での生息を何年にも亘り元気に続けてくれ、裏庭側のガラス戸をけたたましくノックするのに驚かされることが幾度となくあったことも思い出されます。とても頼もしく思える愛らしい隣人でしたが、いつの間にかその姿に会えなくなってしまったのがとても残念でなりません。

(元衛生科学部上席専門研究員)

環境保健研究センター開所式典 (2001. 07. 06)



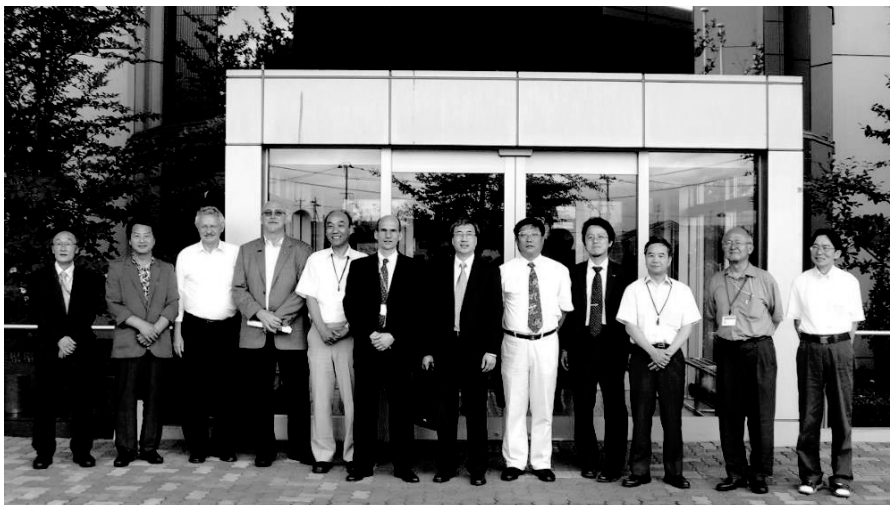
テープカット



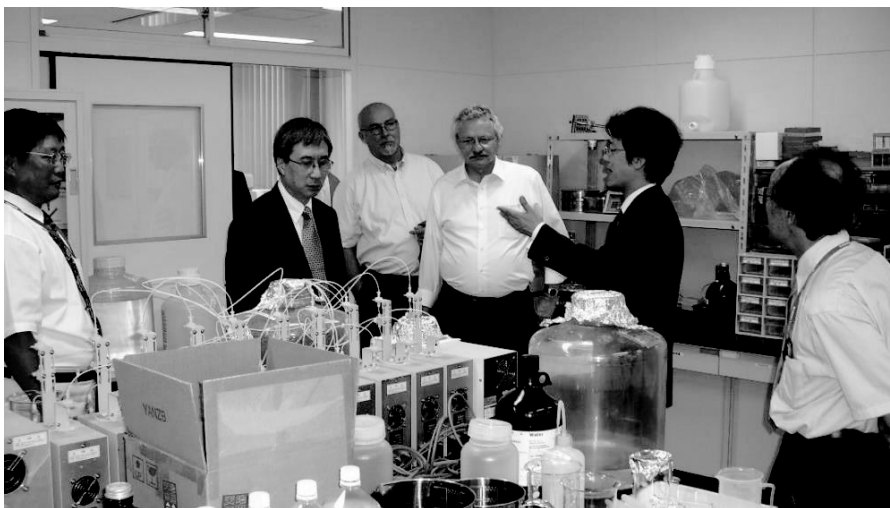
増田 寛也知事 式辞

有機フッ素化合物に係る国際共同研究

国際共同研究者等表敬訪問 (2009. 07. 08)



(左から) センター職員、 国立釜慶大学 (韓国) 玉 坤 教授、 カンサス医科大学 Dr. Curtis D. Klaassen
国際生命科学協会/環境保健科学研究所 Dr. Michel P. Holsapple、 センター職員、 米国環境保護庁 Dr. Andrew Lindstrom
米国環境保護庁 Dr. Christopher Lau、 大連理工大学 (中国) 金一和 教授、 米国環境保護庁 Dr. Shoji F. Nakayama
センター職員 3名



共同研究協定式 in 釜慶大学校 (2009. 07. 30)



(左から) 岩手県環境保健研究センター 所長 滝川 義明、国立釜慶大学大学 玉 坤 教授

東日本大震災津波被災地における環境調査



河川採水（大槌町）
(2011.03.29)

土壌採取（大槌町）
(2011.08.30)



大船渡湾 底質採泥
(2012.10.16)

いわて国際環境シンポジウム (2012. 07. 23)

岩手県環境保健研究センター 所長 滝川 義明挨拶



シンポジウムに併せ知事表敬訪問（達増 拓也知事と講師7名）



訪問研究者（左から）米国環境保護庁 Dr. Andrew Lindstrom、米国環境保護庁 Dr. Christopher Lau
国立医薬品食品衛生研究所長 大野泰雄 先生、国立環境研究所 環境リスク研究センター長 白石寛明 先生
釜慶大学（韓国）玉 坤 先生、大連理工大学（中国）金一和 先生、京都大学大学院 田中周平 先生

新型コロナウイルス感染症に係る検査業務



安全キャビネット内での
ウイルス不活化処理

プレートにPCR検査
試薬・検体を添加



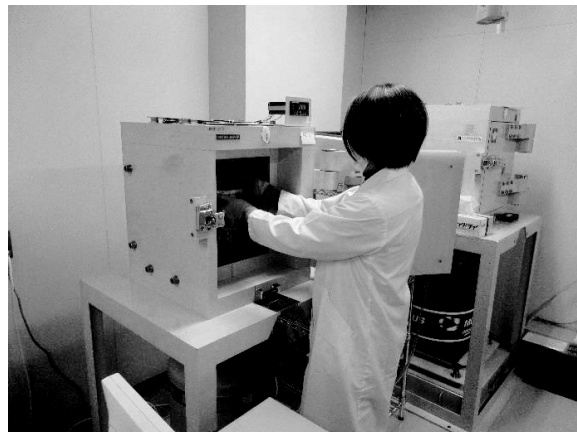
プレートをリアルタイム
PCR装置にセットし
測定開始

環境保健研究センター業務



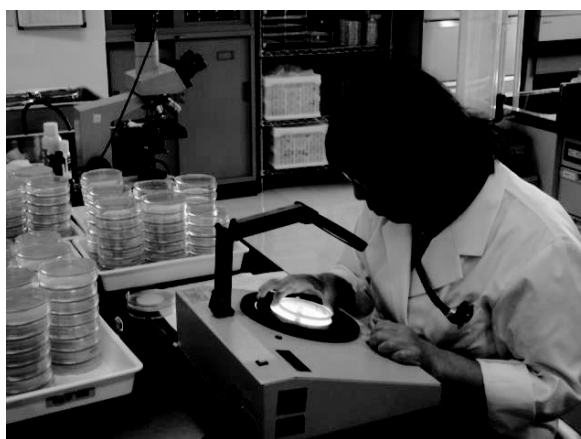
希少植物保護措置指導（地球科学部）

放射能測定（地球科学部）



麻痺性貝毒の研究（衛生科学部）

貝毒検査（衛生科学部）



微生物検査（検査部）

水質分析研修（検査部）

